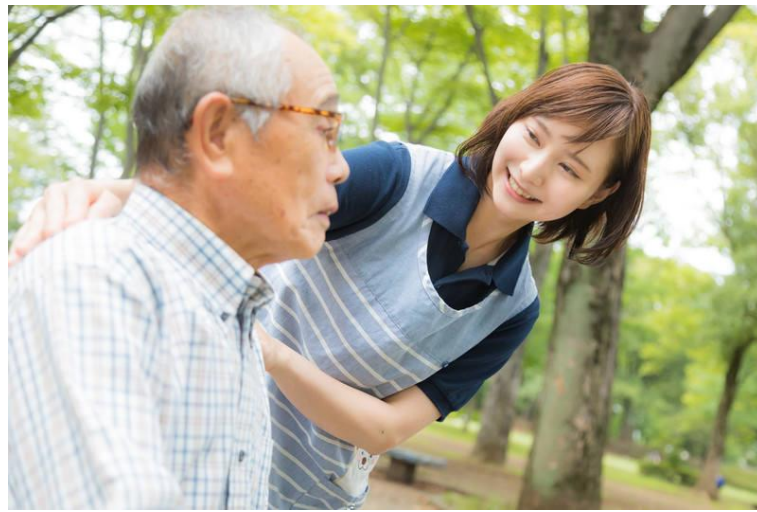




ユニリハの

認知症リハビリテーション研究会



老年心理学と 集団リハビリによる認知症ケア



基礎編



応用編

講師 青木 将剛

日本ユニバーサルリハビリテーション協会



基礎編



第1章 高齢者の老年心理学を学ぶ

第2章 認知症の評価

(心理学が理解できて初めて認知症がわかる)

老年行動学

- 心理学や行動学から高齢者の心理を探ります
- あえて、認知症への対応を考えるのではなく、健康者、高齢者の自然な心理を学ぶ事で、その異常状態である認知症が見えてきます。
- つまり、認知症を知るために比較対象が必要です。それが人間の心理を探求した心理学や、人間の自然な行動を探求した行動学です。

死ぬことは、怖くないんですか？

- なぜ、先の人生が見えてきた高齢者は死ぬことが怖くないのか。
- 心理学や行動学では、ずっと疑問視されてきた。
- ここがわかることで、高齢者の心理学が見えてきた。
- ハッピーな心理をずっと持ち続けるようにプログラムされている。
- 自分を高齢者だと思っていない。
- 記憶力は低下する。だから良かったことしか残さない
- だから、がんこ、わがまま、自尊心を示す。でも悪い事ではない。
- あきおじ。。。になってほしければ、ここを充足する必要がある。



答え

高齢者は

- 死ぬことが怖くありません

②

前頭葉で篩
にかける

④

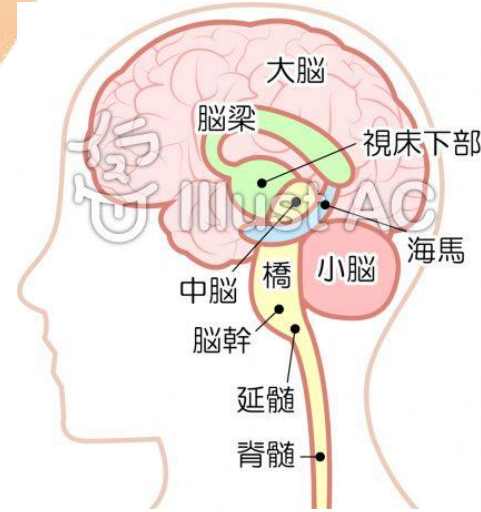
長期記憶と
して保存さ
れる

①

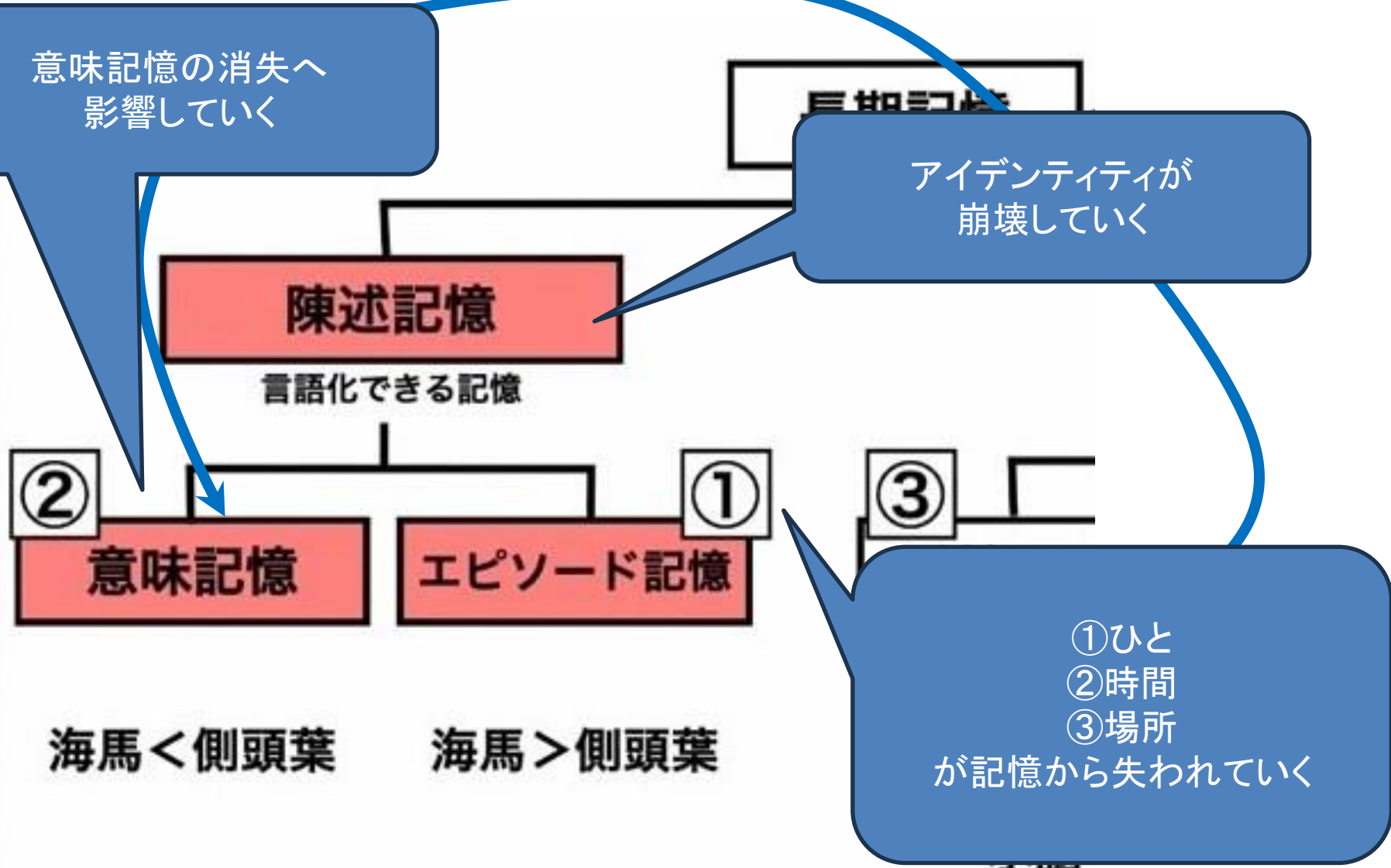
目に情報
が入る

③

海馬に送り、
短期記憶と
して貯蔵



認知症への序章



自尊心を保つために

- 自分という存在を肯定する
- 自分の価値を高めしてくれる情報、都合の良い情報を無意識に拾い集め、記憶し、脳の中に蓄積していく。

やっぱ、俺ってすごーよ
な！！



レミニッセンス・バンプ(自伝的記憶)

- 20代をピークに10代後半から30代前半の青春時代のことを思い出す。
- 青春時代より今に近い30代後半の記憶はあまり思い出さない。



- この青春時代を突出して思い出す現象がレミニッセンス・バンプといえます。
- この現象をリハビリに適応すると結果につながります。

第2章 認知症の評価

見当識が正常か評価する

- 人、時間、場所の記憶があるかどうか評価

- 人が分からない
- 時間が分からない
- 場所が分からない

対象者によって様々な反応が出る。

- ・感情失禁
- ・怒り
- ・ひきこもり
- ・幻覚、幻聴

イメージしてみよう

世にも奇妙な物語・・・

人が分からない...夫にたいして「この人と誰？」

時間が分からない...「タイムスリップしてしまったようだ」

場所が分からない...ある朝起きたら「砂漠の真ん中」にいた

どの時代に生きているかを確認する

- みんな生きている時間や時代背景が違う。
- 忘れていく記憶の中にあって、自我を保つために自分の世界を作って、そこに住もうとする。
- レミニセンスバンプが影響するため、幼少から10代、10代～20代、20代～30代、仕事をしている場合もある。
- 結婚から現代までは記憶に残らない人が多い。夫、妻などは特に忘れる。
- 自分の子供はかろうじて残る可能性はある。